



2011年6月22日放送

## 漢方医人列伝 「細野史郎」

聖光園細野診療所 所長 中田 敬吾

『聖光園細野診療所五十年史』によると、細野先生は1899年（明治32年）8月1日、京都府綾部市梅迫という日本海に面した舞鶴市に近い、草深い田舎で生まれています。19世紀の世紀末で、列強ロシアとの仲が次第に険悪になってきている頃です。漢方医学が明治政府により葬り去られ、漢方の暗黒時代に突入した頃でした。

19世紀の世紀末で、列強ロシアとの仲が次第に険悪になってきている頃です。漢方医学が明治政府により葬り去られ、漢方の暗黒時代に突入した頃でした。

当時の日本は総じて貧しい家庭が殆どでしたが、細野先生の家も貧しく、小学校を卒業しても上級学校に進学することは夢の又夢というような状況でした。そんな中で尋常高等小学校2年の時に母親の急逝に会い、医者になろうと決心されたようです。ところが赤貧洗うがごとくの状態、学費を工面するのも大変苦労しましたが、「天網恢々粗にして失わず」の老子の言葉の如く、細野先生には次々と支援者が現れ、無事に中学校、第三高等学校、京都帝国大学医学部とすすみ、昭和2年大学を卒業して医師になることが出来ました。

京都市左京区鹿ヶ谷で開業する傍ら、大学の松尾内科で胆石症の研究を続け、昭和7年医学博士の学位を授与されています。

1933年（昭和8年）、長男の小児喘息の治療に困窮し、西洋医学治療は勿論、色々な治療を試しましたが治りません。苦心惨憺のすえ漢方薬にてやっと緩解に持ち込むことが出

来ました。この経験で漢方医学の有効性を実感し、以後漢方の研究を決意しました。

漢方は当時京都市左京区一乗寺で開業していた新妻良輔先生に弟子入りして勉強しました。新妻良輔先生の父、新妻莊五郎先生は幕末から明治にかけて活躍した浅田宗伯の高弟で、浅田流漢方を京都で実践された人でした。浅田流漢方が新妻莊五郎先生から息子の良輔氏そして細野先生へと伝えられて今日に至っています。細野先生は浅田宗伯の曾孫弟子にあたります。

師匠の新妻良輔先生は非常に大人しい先生で、何も喋ってくれませんでした。お酒を飲むと饒舌になり、色々と詳しく漢方の話をして下さいました。それで細野先生もお酒を訓練し、師匠を訪ねるときは一升瓶を持参して、診察終了後二人で酒を飲みながら、その日の症例について質問し教えて頂いたと聞いています。

細野先生は当時すでに西洋医学の名医として名前が知られていたようですが、その西洋医学を捨てて漢方の道にはいることは大変勇気の要ることでありました。当時の苦悩する心境を『聖光園五十年史』に書いておられますので、一部をここに紹介します。

「私がこれまでに習得した治療医学上の不満、他面漢方医学への完全な突入により、現実化するやも知れない不安『日常生活への影響』などから、決断への迷いは果てしなく、悶えのうちに眠れぬ夜はどこまでも続くのであった。或いは深夜、近くに延びる“哲学の道”をさまよい歩き、或いは俊寛僧都の謀議のあとと伝えられる、如意ヶ嶽の“談合の滝”に京洛の灯りを足下に見やりつつ、瞑想に耽ったことも幾たびか。

これは現代医学に生きて来たものが、その埒外に逸脱することの悩みであると共に、予見しがたい将来に対しても信念を持って立ち向かうための、当然の産みの悩みでもあった。ある夜、自宅にほど近い若王子の滝のほとりに端座瞑目、水しぶきの音に聴き入っていたとき、ふと心中に光明を覚えたのであった。それは、一切の世の毀誉褒貶を没却して初心に徹し、目的に邁進することこそ浮かぶ瀬もある、との悟りであった。ここに於いて、私は勇猛心を發揮して、現代医学を基礎とした漢方医学に没入し、それにより医者への使命に徹すべきとの決断に奮い立った」

と記載しています。1938年（昭和13年）のことでありました。これ以後細野先生は漢方医学治療に完全に没入されて行きました。

細野先生は大勢のお弟子さんを育てられました。医師としては娘婿の坂口弘、長男の細野八郎を筆頭に内炭精一、柴田良治、有地滋など、日本東洋医学会を支える数多くの人材が細野先生の下から輩出しました。細野先生のお弟子さんで特徴的なのは薬剤師の人も非常に多かったことです。細野先生は漢方治療は品質のよい漢方生薬を使わなければ意味がないと考え、良品の漢方生薬原料を見分けて医師に供給してくれるようにと薬剤師の教育にも熱を入れておられました。入手できる最高の漢薬原料を用いるというのが細野先生の信条でした。

細野先生の業績について語るには時間はいくらあっても足りないほどですが、一言で言えば漢方の近代化への貢献といえます。

先ず挙げなければならないのは「漢方薬の薬理研究の道を開拓されたこと」です。当時は漢方薬の効果のあることは経験で理解できても、どのように作用しているのか科学的な根拠は全くない状態でした。細野先生はこのような状態では漢方治療に発展はないと考え、弟子の坂口、内炭両氏を大学の薬理学教室に派遣して薬理の実験方法を習得させ、診療所内に実験室を作り漢方薬の薬理作用の解明に着手しました。そしてウサギ摘出腸管を用いて芍薬甘草湯の薬理作用を明らかにし、それを昭和 27 年 4 月の第 3 回日本東洋医学会学術総会で発表しました。

このとき東大の板倉博士が壇上まで上がってきて細野先生に握手を求め、「これで漢方に夜明けが来た！」と発表を絶賛されたと聞いています。漢方医学に近代科学のメスを入れた画期的な研究でした。細野先生は漢方薬理が明らかになれば、難しい証の診断をしなくても西洋医学的診断だけで十分漢方薬が使えるようになると常々云っておられました。

細野先生の今ひとつの画期的な業績は「漢方薬のエキス剤の開発と臨床応用への道を開いたこと」です。エキス剤の構想は当時武田薬品におられた渡邊武薬学博士が抱いておられ、それを聞いた細野先生は「漢方の近代化には是非必要なことだ」と考え、エキス剤の共同研究をしようと、日本東洋医学会理事会で提案されました。しかしながら理事会では間中喜雄先生一人が賛成しただけで、あとの全員に反対され、共同研究の実現は出来ませんでした。

「それなら聖光園だけで研究する」と言って聖光園内にエキス剤製造部を創設して、エキス剤の製造と臨床研究に入りました。1951 年（昭和 26 年）のことです。

以後試作を重ね、煎じ薬と殆ど遜色のないエキス剤を製造できるようになり、1955 年（昭和 30 年）に用いる全ての処方薬をエキス剤化し、全面的にエキス剤による漢方治療に入りました。これは小太郎や長倉のメーカーがエキス剤の製造販売を始める 2 年前のことでした。

エキス剤の出現により日本における漢方治療が大きく変革し、漢方治療が日本国内に浸透し、今日の隆盛を来すに至っています。

品質の安定したエキス剤の出現により漢方の基礎及び臨床研究が非常にやりやすくなりました。この結果漢方の EBM が急速に蓄積されてきています。

また携行に便利となり、出張や旅行にも漢方薬を持ってゆけるようになり、患者さんから大変喜ばれました。

細野先生はご自身も水毒体質であったためか、水毒の治療を得意にしておられました。特に脚気及び脚気症候群の診断と治療は大の得意でありました。用いる処方薬は五苓散合九味檳榔湯加呉茱萸木瓜でした。浅田家方九味檳榔湯加呉茱萸茯苓に木瓜を加えそれを細野家方九味檳榔湯としていましたが、それに五苓散を合方した処方薬です。水毒証の疲労倦怠感には非常によく効く処方薬です。

今ひとつ細野先生が工夫された細野家方清暑益気湯も熱中症の予防と治療その他の各種の疲労の治療に有効な処方薬です。アスリートの疲労の予防と回復にもよく効く処方薬で、夏

場の野外運動に必携の処方となっています。

喘息の治療に頻用されている柴朴湯も細野先生が命名された処方で、細野診療所の頻用処方の一つとなっています。

昭和に於ける日本漢方の復興と発展に大きく寄与された細野先生は昭和天皇の亡くなられた同じ年の5月6日早暁、華子夫人と長男八郎氏に見守られ自宅で息を引き取られました。満90歳を迎える3カ月前のことでした。

昭和を思う存分生き抜き、活躍され、昭和と共に去って行かれた大先生でした。